「荒野へ」

マルコの福音書 1:12～13

はじめに

今回も御言葉の「最初の言及」に焦点を当てて聖書を読み解いていきたいと思います。旧約聖書、その最初である創世記を含むトーラーと呼ばれるモーセ五書（創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記）はヘブル語で書かれました。それを土台に旧約聖書全体は記され、さらに定説ではギリシャ語が原語となっている新約聖書ですが、それもこの旧約聖書の土台の上に置かれています。これは揺るがない事実です。つまり聖書は、ヘブル語によって始められた、ヘブル語の土台の上に成り立っているということです。私たちの日本にはこのような慣用句、ことわざがあります。「何事も最初が肝心」、「一日の計は朝にあり、一年の計は元旦にあり」これらの言葉は、物事は何を始めるにしてもまず最初に何をするかが重要であることを説いたものです。一方聖書にはこう記されています。

【新改訳 2017】

出エジプト記

34:19 **最初に**胎を開くものはすべて、わたしのものである。あなたの家畜の雄の**初子**はみな、牛も羊もそうである。

申命記

15:19 あなたの牛の群れや羊の群れに生まれた雄の**初子**はみな、あなたの神、【主】に聖別しなければならない。牛の**初子**を使って働いてはならない。また羊の**初子**の毛を刈ってはならない。

出エジプト記

23:19 あなたの土地の**初穂**の最上のものを、あなたの神、【主】の家に持って来なければならない。

エレミヤ書

2:3 イスラエルは【主】の聖なるもの、その収穫の**初穂**であった。これを食らう者はだれでも罰を受け、わざわいを被った。――【主】のことば――

古来ラビと呼ばれるユダヤ人の聖書学者たちは、これら上記の御言葉や、家庭における長子（長男）の優位性を教えた彼らの文化や言い伝えにならい、聖書の解釈においてもこの思考を採用していました。つまり聖書に記された一つひとつの御言葉は、それぞれの最初の言及に起因し、そこに記された出来事における意味を土台とするという解釈です。まさに言葉の初子、初穂となるものを聖なるもの、神のもの、神を指し示す特別なものとしてこれを取り扱い、その言葉の長子とも言える存在の指し示す意味に従って、その後に記される同じ言葉が使われているその文章または出来事の意味を解釈するのです。

時代の流れとともに、私たちの言葉は絶えずその意味を変化させ続けています。たとえば日本語の「愛」は、本来自己中心的な、私利私欲的な行為を指し示す言葉でしたが、現在は神をも指し示す崇高な言葉になっています。また最近の若者たちがよく使う「やばい」という言葉も、本来は危険や困難を指す言葉でしたが、今では主に「すごい、素晴らしい」という意味で使われています。このように、言葉はその意味を絶えず変化させ続けています。しかし私たちの神は永遠の昔から未来に至るまで、永遠に変わることのない御方です。だとするならば神の語られた御言葉もまた、最初から最後まで、とこしえからとこしえまでその意味は変わることがないはずです。ですから聖書に記された一つひとつの言葉の意味を、それが最初に使われた箇所から解釈することは聖書的であり、神の御性質に則した考え方、捉え方であると言えます。それではこの「最初の言及の法則」に基づいて、今回は以下の御言葉を取り上げて読み解いてみたいと思います。

１．パランの荒野

【新改訳 2017】
マルコの福音書
1:12 それからすぐに、御霊はイエスを荒野に追いやられた。

イェシュアはヨハネからバプテスマを受けられた後、すぐに御霊によって「荒野」へと追いやられます。一見何の変哲もない、ただの状況報告のようです。日本語で「荒野」と聞くと、水も草木もない、人が居住するには困難な、厳しい自然環境を思い浮かべますが、ヘブル語ではミドゥバール(מִדְבָּר)と言い、「荒野」という意味の他に「言う、語る」という意味の動詞ダーヴァル(דָּבַר)が名詞化した派生語と捉えることができ、その意味としては「(神が) 語られること、語られる場所」と解釈することができます。実際にイェシュアはこの「荒野」において

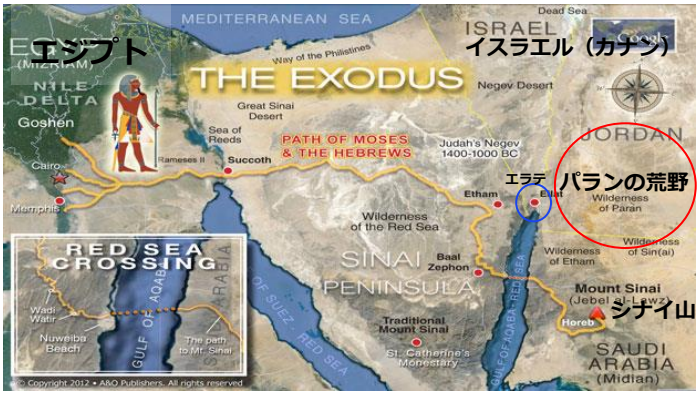
【新改訳 2017】
マタイの福音書
4:4 イエスは答えられた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの**ことば**で生きる』と書いてある。」

と語っておられます。ですから「荒野」には神のダーヴァル、「神の口から出る一つひとつのことば」のままに、その通りに、聞き従われるイェシュアの姿、生き方、あり方が指し示されていると考えられます。またこのミドゥバールが聖書で最初に使われた記述、最初の言及を見てみましょう。

【新改訳 2017】
創世記
14:5 そして十四年目に、ケドルラオメルと彼に味方する王たちがやって来て、アシュタロテ・カルナイムでレファイム人を、ハムでズジム人を、シャベ・キルヤタイムでエミム人を、
14:6 セイルの山地でフリ人を打ち破り、**荒野**の近くのエル・パランまで進んだ。

この記述はアブラハムがいた時代、ケドルラオメルという王が、自分に背いた五人の王たちとの戦争を描いたその一場面ですが、ここで「『荒野』の近くのエル・パラン」という箇所に、最初のミドゥバール

が使われています。この記述からこの「荒野」は、葦の海（紅海）沿岸の港町で，古くはエル・パランと呼ばれていましたが、後にイスラエル人が宿営したエラテ、またはエツヨン・ゲベル（申 2:8、Ⅰ列 9:26）とも呼ばれ、ダビデ王の時代にはイスラエルが占有し、港を開いた場所です。（Ⅱサム 8:14、Ⅰ列 9:26、Ⅱ歴 8:17）。ですから地理的見解からこの「荒野」とは、「パランの荒野」を指すと考えられます。そこはかつてアブラハムの子、イシュマエルが住み（創世記 21:21）、エジプトを脱出したイスラエル人は、シナイ山から、このパランの荒野に宿営しました。（民数記 10:12、12:16）またこの地からカナンへの斥候が送り出されました（民数記 13:3）。また荒涼たる荒野であったため、聖書では「あの大きな恐ろしい荒野」と呼んでいます（申命記 1:19）。この地名の由来としてパラン(פָּארָן)は、パーアル(פָּאַר)「栄光を現わす、誇る」という意味の動詞の派生語であると考えられます。ではこのパーアルの最初の言及からこの言葉の本来の意味を見てみましょう。



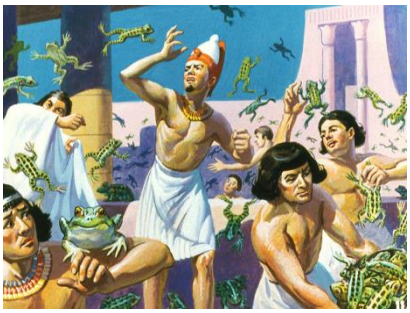
【新改訳 2017】

出エジプト記

8:8 ファラオはモーセとアロンを呼び寄せて言った。「私と私の民のところから蛙を除くように、【主】に祈れ。そうすれば、私はこの民を去らせる。【主】にいけにえを献げるがよい。」

8:9 モーセはファラオに言った。「蛙があなたとあなたの家から断たれ、ナイル川だけに残るようにするため、私が、あなたと、あなたの家臣と民のために祈るので、いつがよいかを**指示してください**。」

8:10 ファラオが「明日」と言ったので、モーセは言った。「あなたのことばどおりになりますように。それは、あなたが、私たちの神、【主】のような方はほかにいないことを知るためです。



これはモーセを通して、神がエジプトに起こされた十の災いの一つで、蛙がエジプト中に大量発生するという場面ですが、ここでモーセがエジプトの王ファラオに「いつがよいかを『指示してください。』」と言っている箇所に、聖書で最初のパーアルが使われており、このようにパーアルとは本来、「いつ何をするかを指示する、知らせる」という意味があると考えられます。またその指示の内容とは、「蛙があなたとあなたの家から断たれ、ナイル川だけに残るようにするため」、つまり死に絶える蛙と、生き残る蛙に表された、滅びる人と救われる人についての神の御計画を指し示していると考えられます。ここでモーセが「あなたのことばどおりになりますように。」と言っているように、神の語られる御言葉、その言いつけ、知らせを聞き、その御計画に従うことが「パランの荒野」という、「荒野」ミドゥバールの最初の言及の中に表されていると考えられます。ですからこの「荒野」に、イエシュアが御霊とともに行かれたということは、イエシ

ュアも、そして同じく御霊も、御父である神のダーヴァル、語られる御言葉にのみ聞き従う、すなわち人の救いと滅びに関する、神の御計画のために生きる者であるということが指し示されていると考えられます。

2．追いやる

ちなみに「荒野に『追いやられた』」と訳されているヘブル語ヤーツァー(יָצָא)は本来、神が天地創造の際に草や木などの植物を生えさせたことに使われた動詞です。

【新改訳 2017】
創世記
1:11 神は仰せられた。「地は植物を、種のできる草や、種の入った実を結ぶ果樹を、種類ごとに地の上に芽生えさせよ。」すると、そのようになった。
1:12 地は植物を、すなわち、種のできる草を種類ごとに、また種の入った実を結ぶ木を種類ごとに**生じさせた**。神はそれを良しと見られた。

ここで「地は植物を…『生じさせた』」と訳されているのが聖書で最初のヤーツァーです。天地創造の初め、神が仰せられるまで、地には雨も降らず、草も木もなく（創世記 2:5)、地はまさに「荒野」のようでした。ですからこのヤーツァーには「荒野を豊かな地にする」という意味があると考えられます。イザヤ書にはこれを神の御計画にたとえて以下のように預言されています。

【新改訳 2017】
イザヤ書
41:14 恐れるな。虫けらのヤコブ、イスラエルの人々。わたしがあなたを助ける。――【主】のことば ――あなたを贖う者は**イスラエルの聖なる者**。
41:17 苦しむ者や貧しい者が水を求めてもそれはなく、その舌は渇きで干からびる。わたし、【主】は彼らに答え、イスラエルの神は彼らを見捨てない。
41:18 わたしは裸の丘に川を開く。平地のただ中には泉を。**荒野**を水のある沢とし、砂漠の地を水の源とする。
41:19 わたしは**荒野**に、杉、アカシヤ、ミルトス、オリーブの木を植え、荒れ地に、もみの木、すずかけの木、檜をともに植える。
41:20 それは、【主】の手がこれを行い、**イスラエルの聖なる者**がこれを創造したことを、彼らが見て知り、心に留めて、ともに悟るためである。

51:3 まことに、【主】はシオンを慰め、そのすべての廃墟を慰めて、その**荒野**をエデンのようにし、その砂漠を【主】の園のようにする。そこには楽しみと喜びがあり、感謝と歌声がある。

このように、「荒野」に植物を「生じさせる」、エデンの園のような豊かな地へと回復される御方、「イスラエルの聖なる者」それはイェシュアであるということが「御霊はイエスを**荒野**にヤーツァー『追いやられた』。」という御言葉の中に表されていると考えられます。

３．すぐに

またこの「それから**すぐに、**御霊はイエスを荒野に追いやられた。」の「すぐに…する」という表現は、このマルコの福音書には数多く見られます。ヘブル語ではこれにマーハル(מָהַר)という動詞が使われており、この１章だけでも５回も使われています。それだけにこの言葉が重要な意味を持っていると考えられます。ではこのマーハルが聖書で最初に使われた出来事から、その本来の意味を考えてみたいと思います。

【新改訳 2017】

創世記

18:1 【主】は、マムレの樫の木のところで、アブラハムに現れた。彼は、日の暑いころ、天幕の入り口に座っていた。

18:2 彼が目を上げて見ると、なんと、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはそれを見るなり、彼らを迎えようと天幕の入り口から走って行き、地にひれ伏した。

18:3 彼は言った。「主よ。もしもよろしければ、どうか、しもべのところを素通りなさらないでください。

18:6 アブラハムは、天幕のサラのところに**急いで**行って、「**早く**、三セアの上等の小麦粉をこねて、パン菓子を作りなさい」と言った。

18:7 そして、アブラハムは牛のところに走って行き、柔らかくて、おいしそうな子牛を取り、若い者に渡した。若い者は**手早く**それを料理した。

18:8 それからアブラハムは、凝乳と牛乳と、料理した子牛を持って来て、彼らの前に出したので、彼らは食べた。彼自身は木の下で給仕をしていた。

ここで 18:6「急いで」、「早く」と訳されているのが聖書で最初のマーハルで、次の 18:7 にも「手早く」と訳されている箇所にも使われています。神から遣わされた三人の人、彼らのためにアブラハムがマーハル「急いで」用意し、また用意させたもの、それは豪華な食事（意訳：上等の小麦粉で焼いたパンケーキ、搾りたてのミルク、最高級の子牛のステーキなど）で飾られた、神を歓迎する食卓、神との交わりでした。このようにマーハルとは本来、人が神を喜び迎えること、歓迎の交わりを指し示すと考えられます。しかもここでアブラハムが「日の暑いころ、天幕の入り口に座っていた。」とあります。日差しのきつい時間帯は、それを避けるために入り口ではなく家の中にいるのが普通です。ですからこの様子は、彼が神の来られるのを切実に待ち望んでいたことを表していると考えられます。神が来られるのを待ち望み、そして喜び迎えるアブラハム、これはイェシュアの地上再臨を連想させる、指し示す出来事だとも考えられます。イェシュアがこの地上に再臨される目的、それは神がアブラハムと交わされた約束を果たすためです。

【新改訳 2017】
創世記
12:2 …わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。
12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。**地のすべての部族は、あなたによって祝福される。**」

この約束、契約は神がアブラハム、イサク、ヤコブすなわちイスラエルとその子孫たちに与えられたものです。この約束は人類史の中で未だ果たされてはいません。ですからイエシュアはこれを果たすために地上に再臨されると考えられます。話が少し飛躍しすぎたかもしれませんが、神とイスラエルの父祖であるアブラハムによって備えられる豊かな食卓、交わり、それがマーハルという言葉に本来表された意味、指し示された出来事であると考えられ、述べたようにマルコの福音書においてこのマーハルが多用されることを考えますと、このアブラハムによって示された神と人の食卓、交わりが、いかに喜ばしく、かつ重要な事柄であるかがうかがえます。またこの福音書に限らず、

【新改訳 2017】
ヨハネの黙示録
22:20 これらのことを証しする方が言われる。「しかり、わたしは**すぐに来る。**」アーメン。主イエスよ、来てください。

という聖書の締めくくりとも言えるこの御言葉の中にも「すぐに」マーハルが使われています。ですからこの言葉は時間的な早さというよりもむしろ緊急性、何よりも優先すべき重要なこと、最も待ち望まれている事柄を意味し、そしてその内実は、アブラハムによって示された神と人の食卓、交わりであり、「わたし」主イエシュアとは、そのために来られる御方であるということが指し示されていると考えられます。

以上のマルコ 1:12「それからすぐに、御霊はイエスを荒野に追いやられた。」に使われている言葉の最初の言及に基づいた意味を端的にまとめると、
・「すぐに…する」マーハル(מָהַר)　→神と人の交わりを備える
・「荒野」ミドゥバール(מִדְבָּר)　→神の御言葉、御計画にのみ聞き従う
・「追いやる」ヤーツァー(יָצָא)　→エデンを回復させるイスラエルの聖なる者
となり、これらがすべてイエシュアの存在とその働きを明確かつ詳細に指し示していると言えます。

４．二つの出来事

1:13 イエスは四十日間荒野にいて、サタンの試みを受けられた。イエスは野の獣とともにおられ、御使いたちが仕えていた。

ここには相反する全く対照的な二つの出来事が記されています。まず一つ目は「四十日間荒野にいて、サタンの試みを受けられた」ことです。ヘブル語で「四十日」を意味するアルバーイーム(אַרְבָּעִים)ヨーム(יוֹם)は本来、ノアの箱舟の出来事で、地上に降り注いだ「雨」を指し示した言葉でした。

【新改訳 2017】
創世記
7:4 あと七日たつと、わたしは、地の上に**四十日四十夜**、雨を降らせ、わたしが造ったすべての生けるものを大地の面から消し去る。」

「雨」とは空からつまり天から「地の上に」降って来る、降りて来るものです。ですからこの「四十日」アルバーイーム・ヨームは、イェシュアが天から降りて来られた御方であることを指し示していると考えられます。また「サタンの試みを受けられた」とありますが、「サタン」ヘブル語でサーターン(שָׂטָן)とは悪魔の名前、固有名詞のように捉えられがちですが、本来は「敵、敵対者」という意味の普通名詞です。その最初の言及を見てみましょう。

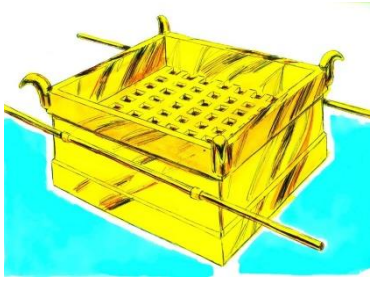
【新改訳 2017】
民数記
22:21 バラムは朝起きて、自分のろばに鞍をつけ、モアブの長たちと一緒に行った。
22:22 しかし、彼が行こうとすると、神の怒りが燃え上がり、【主】の使いが彼に**敵対して**道に立ちはだかった。

これはモーセの時代、モアブの王の命によりバラクという一人の占い師が、イスラエルを呪うために出かける場面ですが、ここで「主の使いが彼に『敵対して』」と訳されているのが本来のサーターンです。このようにここでは「主の使い」がサーターンです。ですから悪魔や悪魔に従う者にとって神はサーターンですし、神に逆らう人もまた神にとってサーターンなのです。実際にイェシュアは弟子のペテロに向かって「下がれ、サタン。」と言われたことがあります（マルコ 8:33)。そしてそのサーターンからイェシュアは「試みを受けられる」ですが、「試みる」ことを意味するヘブル語ナーサー(נָסָה)の最初の言及を見てみましょう。
【新改訳 2017】
創世記
22:1 これらの出来事の後、神がアブラハムを**試練**にあわせられた。神が彼に「アブラハムよ」と呼びかけられると、彼は「はい、ここにおります」と答えた。
22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。」

これは有名な、アブラハムが愛する一人息子のイサクを神に献げるという出来事です。この「試練」の内容は「愛しているひとり子」をいけにえとして献げる、つまり殺すというものです。これはもちろん御父である神の「愛しているひとり子」であるイェシュアの死、十字架を指し示した出来事だと考えられます。ですから「イエスは四十日間荒野にいて、サタンの試みを受けられた。」とは、神に敵対する者たちによって、あるいは神に敵対するというその罪のために、いけにえとして殺される「愛しているひとり子」、それは御父である神の御子イェシュアであるということが指し示されていると考えられます。ちなみに先

に述べた「四十」を意味するアルバーイームは、「四角(形)」という意味を持つラーヴァ(רָבַע)という分詞の派生語なのですが、この最初の言及はなんといけにえを献げるための「祭壇」を指し示しています。

【新改訳 2017】
出エジプト記
27:1 祭壇をアカシヤ材で作る。その祭壇は長さ五キュビト、幅五キュビトの**正方形とし**、高さは三キュビトとする。



ここで「正方形」と訳されているのが本来のラーヴァです。このように、ラーヴァはいけにえを献げる「祭壇」を指し示しています。イエシュアはまさに私たちの罪の赦しのためのいけにえとなられた御方です。

そして二つ目の出来事「野の獣とともにおられ、御使いたちが仕えていた。」ことについてですが、「野の獣」と訳されていますが、ヘブル語では「生物、命あるもの」という意味の名詞ハッヤー(חַיָּה)に冠詞のついた複数形でハハッヨート(הַחַיּוֹת)という言葉が使われており、これはエゼキエル書のみで使われる、地上ではなく「御使い」のような天上の「生きもの」（おそらくケルビム）を指す言葉であると考えられます。

【新改訳 2017】
エゼキエル書
1:4 私が見ていると、見よ、激しい風が北からやって来た。それは大きな雲と、きらめき渡る火を伴い、その周りには輝きがあった。その火の中央からは琥珀のようなきらめきが出ていた。
1:5 その中に**生きもの**のようなものが四つ現れ、その姿は次のようであった。彼らは人間のような姿をしていたが、
1:6 それぞれ四つの顔と四つの翼を持っていた。
1:13 それらの**生きもの**の姿は燃える炭火のようであり、たいまつのように見えた。火がそれらの生きものの間を行き来していた。火には輝きがあり、その火から稲妻が出ていた。
1:14 それらの**生きもの**は、閃光のように出たり入ったりしていた。
1:15 私がその**生きもの**を見ていると、それら四つの顔の生きもののそばには、地の上にそれぞれ輪が一つずつあった。

つまり「イエスは野の獣とともにおられ、御使いたちが仕えていた。」とは、ヘブル語で見るならば同じ内容のものを言い換えて繰り返している、並行法、パラレリズムによる強調表現だと思われ、すなわちこれは、イエシュアという御方が地上の者ではなく天上の者であり、その天上の者たちに仕えられる御方、すなわち神であるということが強調されているのだと考えられます。

このように「イエスは四十日間荒野にいて、サタンの試みを受けられた。イエスは野の獣とともにおられ、御使いたちが仕えていた。」とは、

イェシュアという御方が

・罪の赦しのためのいけにえとなるために、天から降りて来られた、神の御子であるということ

・御使いたちに仕えられる、天上の存在、神なる御方であるということ

が指し示されていると考えられます

５．イェシュア

このように、ヘブル語による最初の言及によって見出されるもの、導き出される答えはすべてただ一つの存在だけを指し示しています。もちろんそれはイエス・キリスト、メシアであるイェシュアです。まさに

【新改訳 2017】

ヨハネの福音書

1:1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

1:2 この方は、初めに神とともにおられた。

と記されている通りです。「初めにあったことば」はすべて神の初子、長子であるイェシュアを指し示すのです。つまりイェシュアがどのような御方で、何をなされる御方なのかが、今回取り上げたマルコ 1:12 のように、一つひとつの御言葉のその最初の言及の中に指し示されているのです。イェシュアは「荒野」へ行かれました。そこは草木の生えない、雨も降らない、創世記 2:5 に記された天地創造の最初の状態のような場所であると述べました。つまりイェシュアは「最初の場所」におられる、すなわち最初の言及の中に見出されるということを、自らの行為をもってここに示されたのではないでしょうか。ですから御言葉の最初の言及に目を留めることは、聖書の中の「荒野へ」行くようなものであると言うことができます。そしてそこにイェシュアがおられるのです。ですから私たちは、助け主である御霊とともに、ますますこの御言葉の「荒野へ」と出て行ってまいりましょう。